

子どもの生活に関する実態調査概要

I 調査概要

(1) 調査の目的

和泉市では、効果的な子どもの貧困対策を検証するために調査を実施し、得られた結果を分析することによって、支援を必要とする子どもや家庭に対する方策を検証することを目的としている。

(2) 調査方法

和泉市内の調査対象の世帯に、学校を通じて調査票を配付し、学校回収により回答を得たもの。

(3) 調査対象者

小学校5年生・その保護者(1,716 世帯)、中学校2年生・その保護者(1,648 世帯)

(4) 調査実施日

令和5年9月5日～令和5年9月 22 日

(5) 調査配布・回収率(数)

	回収率(%)	回収数	配布数
小学5年生	71.4	1,225	1,716
小学5年生の保護者	71.4	1,226	1,716
中学2年生	65.6	1,081	1,648
中学2年生の保護者	65.9	1,086	1,648
小学5年生・中学2年生合計	68.5	2,306	3,364
小学5年生保護者・中学2年生保護者合計	68.7	2,312	3,364
計	68.6	4,618	6,728

II 調査結果の概要

(1) 経済状況について

● 相対的貧困率は14.8%

中央値以上	942 名	50.5%
困窮度Ⅲ(中央値の 60%～100%)	542 名	29.0%
困窮度Ⅱ(中央値の 50%～60%)	106 名	5.7%
困窮度Ⅰ(中央値の 50%以下)	277 名	14.8%
計	1,867 名	100.0%

- 貧困家庭の 80%以上が困難を抱えており、困窮度が深刻化するにしがいい生活上の困難は増す傾向にある。生活困窮は子どもの進路や学習環境、家族以外の社会的交流を行う機会を制限し、生活インフラへの支払いの滞りや年金支払いの義務が果たせなくなることに加え、将来への不安感が多い。

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
どれもあてはまらない	13.7%	43.2%	-29.5 ポイント
食費を切り詰めた	49.1%	23.8%	25.3 ポイント
理髪店・美容院に行く回数を減らした	44.0%	19.9%	24.1 ポイント
冷暖房使用を控えた	35.4%	15.1%	20.3 ポイント
趣味やレジャーの出費を減らした	54.2%	32.6%	21.6 ポイント
新しい衣服・靴を買うのを控えた	54.5%	26.9%	27.6 ポイント
国民健康保険料の支払いが滞ったことがある	10.5%	0.1%	10.4 ポイント
国民年金の支払いが滞ったことがある	9.0%	0.3%	8.7 ポイント
生活の見通しがたなくて不安になったことがある	34.7%	8.7%	26.0 ポイント
お子さんを習い事に通わすことができなかった	25.3%	5.4%	19.9 ポイント
お子さんを学習塾に通わせることができなかった	22.7%	5.8%	16.9 ポイント
お子さんの進路を変更した	5.1%	1.0%	4.1 ポイント
家族旅行(日帰りのおでかけを含む)ができなかった	36.5%	8.2%	28.3 ポイント

- 経済的困難な家庭では、貯蓄不足により、将来子どもに起こり得るリスク(病気や進路選択など)に備えることや、子どもに対する投資が難しくなる

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
貯蓄をしている	35.7%	79.1%	-43.4 ポイント
貯蓄をしたいが、できていない	63.5%	20.2%	43.3 ポイント

- ヤングケアラーは全体では 19.1%だが、困窮度Ⅰでは 24.0%となっており、経済的困難な家庭で高くなっている

(2) 家庭状況(制度等) について

- 社会保障制度の捕捉率を上げるために、給付に必要な世帯が利用しやすいような各制度の要件緩和、手続きの簡素化等の施策が求められている。

	困窮度Ⅰ	困窮度Ⅱ	全体
就学援助	53.4%	31.1%	12.1%
児童扶養手当	77.4%	65.2%	55.5%
生活保護	1.4%	2.8%	0.6%

- ひとり親世帯で、養育費の取り決めや受け取りをしている世帯は、全体で 34.5%にとどまっている。離別の場合、生活状況の激変のなか、ひとり親自身が養育費の取り決めを行うことは容易なことではないため、相談機関等の支援策の充実が求められる。

	困窮度Ⅰ	困窮度Ⅱ
取り決めをしておらず、受け取っていない	45.2%	21.1%

- 妊娠・出産しても学修を中断せず継続できるような学修面でのサポート体制、子育て支援がや学び直し」を可能にするような学修機会の提供等が求められる。

	中学校卒業	高等学校中途退学
初めて母親となった年齢が10代の最終学歴	18.4%	22.4%

- 住宅形態別に家計の状況をみると、「府営・市営の住宅」の生活困窮が目立っている。

赤字である	39.4%
貯蓄をしたいが、できていない	63.6%

(3) 雇用について

- 困窮度が高い人は非正規雇用、自営が多い

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
正規	50.9%	91.2%	-40.3 ポイント
非正規	24.9%	0.4%	24.5 ポイント
自営	17.7%	6.8%	10.9 ポイント

- 困窮度が高い人の学歴は低い傾向にある

母親の最終学歴	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
大学卒業	11.2%	29.2%	-18.0 ポイント
高専、短大、専門学校卒業	36.5%	46.7%	-10.2 ポイント
高等学校卒業	34.3%	8.3%	26.0 ポイント

父親の最終学歴	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
大学卒業	20.6%	45.0%	-24.4 ポイント
高専、短大、専門学校卒業	9.7%	15.6%	-5.9 ポイント
高等学校卒業	25.6%	24.0%	1.6 ポイント

- 非正規雇用は正規雇用に比べ、生活が苦しい

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
貯蓄が出来ている	16.0%	44.0%	-28.0 ポイント
家計状況赤字である	45.6%	19.3%	26.3 ポイント

(4) 健康について

- 困窮度による生活習慣や健康状態の格差が見られる

朝食の頻度

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
毎日またはほとんど毎日	80.0%	89.7%	-9.7 ポイント

保護者の自覚症状

	困窮度 I ①	中央値以上②	①－②
ねむれない	16.6%	10.3%	6.3 ポイント
やる気が起きない	24.5%	8.4%	16.1 ポイント
イライラする	35.7%	29.1%	6.6 ポイント
よく腰がいたくなる	34.3%	27.6%	6.7 ポイント
よく頭がいたくなる	35.7%	25.1%	10.6 ポイント
不安な気持ちになる	38.6%	22.8%	15.8 ポイント

子どもの心の状態(質問項目に「そんなことはない」と回答した割合)

	困窮度 I ①	中央値以上②	①－②
一人ぼっちのような気がする	62.5%	67.8%	-5.3 ポイント
まわりが気になる	41.5%	46.7%	-5.2 ポイント
やろうとおもったことがうまくできる	26.5%	20.6%	5.9 ポイント

子どもの心の状態

	困窮度 I ①	中央値以上②	①－②
生活を「とても楽しんでいる＋楽しんでいる」	66.4%	80.3%	-13.9 ポイント
将来に対して「希望が持てる」	18.1%	38.4%	-20.3 ポイント
ストレスを発散できるものが「ある」	35.0%	44.3%	-9.3 ポイント
自分が「とても幸せだと思う」	24.5%	35.1%	-10.6 ポイント

- 経済的な理由による保護者の経験が増えるにしたがって、子どもは「ねむれない」「よく頭がいたくなる」「よくかぜをひく」「よくかゆくなる」の割合が高くなる傾向にあり、保護者では「ねむれない」「よく頭がいたくなる」「歯がいたい」「不安な気持ちになる」「不安な気持ちになる」「ものを見づらい」「聞こえにくい」「よくかぜをひく」「よくかゆくなる」「まわりが気になる」「やる気が起きない」「イライラする」「よく肩がこる」「よく腰がいたくなる」の割合が高くなる傾向にある。
- 就労状況別に朝食の頻度見ると、毎日とる割合は、「非正規」「無業」は「正規」「自営」に比べ、少ない。

	正規	自営	非正規	無業
毎日またはほとんど毎日とっている	87.9%	87.6%	73.6%	76.5%

- 就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規」(5.5 点)、「自営」(5.6 点)が高く、「非正規」で 5.0 点と低下し、「無業」で 4.5 点と最も低い結果となった。「非正規」「無業」の世帯ではソーシャルサポートの不足が示唆される。
- 朝食の頻度別に子どもの将来への期待度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人は、「とても期待している」「期待している」をあわせて、86.3%であるのに対して、「食べない」人は、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて 72.3%と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが子どもの将来に対する期待が高い結果となった。
- 朝食の頻度別に子どもとの関わり時間を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「食べない」人よりも子どもと一緒にいる時間が長くなっている。

- 朝食の頻度別に子どもの自己効力感(セルフ・エフィカシー)の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、8.5 点であるのに対して、「食べない」では、6.9 点と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人のほうが子どもの自己効力感(セルフ・エフィカシー)が高い結果となった。

※ 「自分に自信がある」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「自分の将来の夢や目標を持っている」の3項目について、それぞれ4段階で評価させ、その値を合計した得点を、セルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、自己効力感(セルフ・エフィカシー)が高いことを表す。

(5) 家庭生活・学習について

- 生活困窮が保護者と子どもの間のコミュニケーションや子どもの生活リズムに影響を及ぼしている。

	困窮度 I ①	中央値以上②	①－②
おうちの大人の人と朝食をとることが「まったくない」	17.8%	11.0%	6.8 ポイント
保護者の子どもとの会話頻度を「よくする」	63.9%	69.4%	-5.5 ポイント
子どもの将来に「とても期待している」	8.8%	24.8%	-16.0 ポイント

- 子どもの遅刻頻度が多いほど、保護者の子どもに対する期待が高まりにくい傾向が見られ、保護者から期待されていない希薄な関係性の中で、様々な悩みを抱え込んでいると思われる。

	遅刻はしない①	週に 1 回以上遅刻する②	①－②
とても期待している	22.8%	15.6%	7.2 ポイント
いやなことや悩んでいることはない	40.6%	27.7%	12.9 ポイント

- 経済的に困難な世帯の子どもは、通学が難しくなっているほか、学習習慣や読書習慣が定着しにくく、結果的に学習理解が不十分となっている可能性が示された。また、子ども自身も保護者も大学以上の高いレベルの教育を望みにくく、経済的事情と学習理解の低さのいずれもが要因となっている可能性がある。

		困窮度 I ①	中央値以上②	①－②
学校に、ほぼ毎日通っている		88.4%	94.6%	-6.2 ポイント
学校がある日の勉強時間	まったくしない	6.4%	9.4%	-3.0 ポイント
	30 分より少ない	19.3%	14.0%	5.3 ポイント
学校がない日の勉強時間	まったくしない	37.8%	20.8%	17.0 ポイント
授業以外の読書時間	まったくしない	50.2%	40.8%	9.4 ポイント
学習理解度	よくわかる	15.6%	32.5%	-16.9 ポイント
子ども自身の希望する進学先が大学		33.8%	40.6%	-6.8 ポイント
保護者の子どもに希望する進学先が大学		44.0%	69.4%	-25.4 ポイント
子ども自身の希望する進学先が高校		20.7%	11.5%	9.2 ポイント
保護者の子どもに希望する進学先が高校		20.9%	7.1%	13.8 ポイント

- 起床時間や朝食など、朝の習慣が身についていない子どもは、学習習慣・読書習慣が身についていない傾向が見られ、朝の習慣が身についていないことが遅刻につながり、授業を受けられていないため学習理解に影響が出ている可能性がある。

- ヤングケアラーの可能性のある子どもは家庭生活や学習状況に対して様々な困難を抱えている可能性が高く、このような子どもたちに対するフォローや施策支援が必要であると考えられる。

	世話をしている人が いる①	世話をしている人が いない②	①－②
持ち物の忘れ物が多い	25.6%	18.4%	7.2 <small>ポイント</small>
提出物を出すのが遅れることが多い	20.0%	14.1%	5.9 <small>ポイント</small>
大学進学を希望	30.4%	38.4%	-8.0 <small>ポイント</small>

(6) 対人関係について

- 経済状況によって、子どもの教育的な活動へのアクセス、家族以外の社会的交流や人間関係を築く機会が制限されるだけでなく、帰属感の薄さが子どもの自己効力感にも影響を及ぼす可能性があることが示唆される。

		困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
放課後に 過ごす場所	塾	23.6%	34.8%	-11.2 <small>ポイント</small>
	習い事	25.1%	36.2%	-11.1 <small>ポイント</small>
放課後に一緒に 過ごしている人物	きょうだい	46.9%	53.6%	-6.7 <small>ポイント</small>
	おうちの人以外の大人	17.1%	4.0%	13.1 <small>ポイント</small>
	学校以外のともだち	5.8%	3.3%	2.5 <small>ポイント</small>
楽しいこと	塾や習いごとで過ごしているとき	18.2%	24.6%	-6.4 <small>ポイント</small>
悩んでいること	学校や勉強のこと	25.1%	20.8%	4.3%
	進学・進路のこと	20.7%	14.9%	5.8%
子どもの自己効力感		8.19	8.41	-0.22

- 経済的困難な家庭では、子どもが家族の世話を担っているケースが多く、家族の世話をしている子どもにとって、周りの支えが重要であり、社会的支援を必要としていることが示唆される。

	困窮度Ⅰ①	中央値以上②	①－②
誰かの世話をしている	24.0%	15.4%	8.6 <small>ポイント</small>

		世話をしている①	世話をしていない②	①－②
相談 相手	学校以外のともだち	12.0%	7.1%	4.9 <small>ポイント</small>
	スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー	1.6%	1.0%	0.6 <small>ポイント</small>
	学童保育の先生	1.1%	0.4%	0.7 <small>ポイント</small>
	子ども専用の電話相談	0.5%	0.2%	0.3 <small>ポイント</small>
居場所	平日の夜や休日を過ごすことができる場所	23.1%	20.9%	2.2 <small>ポイント</small>
	昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所	14.1%	8.1%	6.0 <small>ポイント</small>

- 誰かの世話をすることで社会経験が詰まれ、自信や責任感がはぐくまれていることが示唆される。このことにより、将来について思案する機会が増えることにつながり、夢や目標の設定、更には進学先として資格など職につながりやすい進学先を選ぶことにつながっていると考えられる。

	世話をしている①	世話をしていない②	①－②
自分に自信が「ある」または「どちらかというところ」	59.2%	53.3%	5.9 ^{ポイント}
自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	27.9%	23.8%	4.1 ^{ポイント}
自分の将来の夢や目標を持っている	51.9%	40.4%	11.5 ^{ポイント}
専門学校・高等専門学校への進学を希望	17.0%	11.7%	5.3 ^{ポイント}

- 子どもの居場所の利用有無別に保護者の相談相手・相談先をみると、子どもが居場所を利用している家庭は、そうでない家庭と比べて、相談機関や専門職に相談する割合が高く、子どもの居場所が様々な専門家や機関との連携を可能にしており、総合的なサポート体制として機能していると考えられる。

	居場所を利用している①	利用していない②	①－②
学校の先生やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー	16.0%	9.2%	6.8 ^{ポイント}
公的機関や役所の相談員	4.1%	1.8%	2.3 ^{ポイント}
学童保育の指導員	1.4%	0.7%	0.7 ^{ポイント}
地域の民生委員・児童委員	0.6%	0.3%	0.3 ^{ポイント}
民間の支援団体・カウンセラー(電話相談含む)	0.6%	0.4%	0.2 ^{ポイント}
医療機関の医師や看護師	8.6%	4.0%	4.6 ^{ポイント}